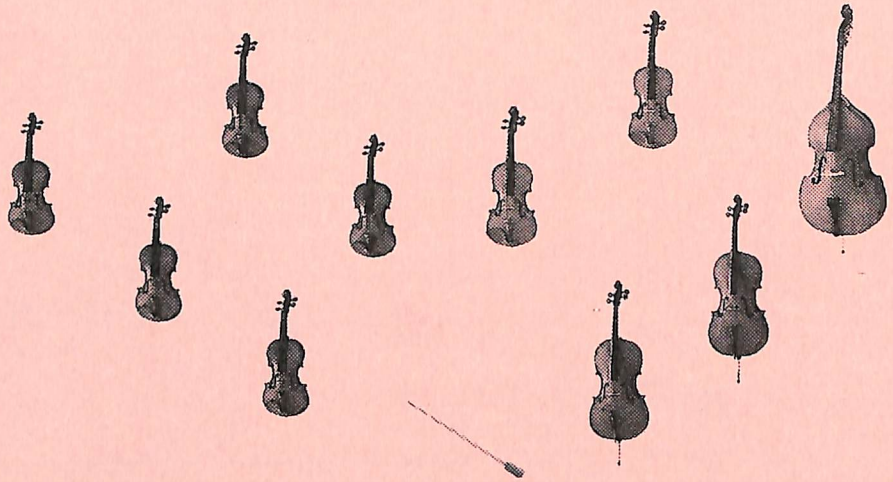
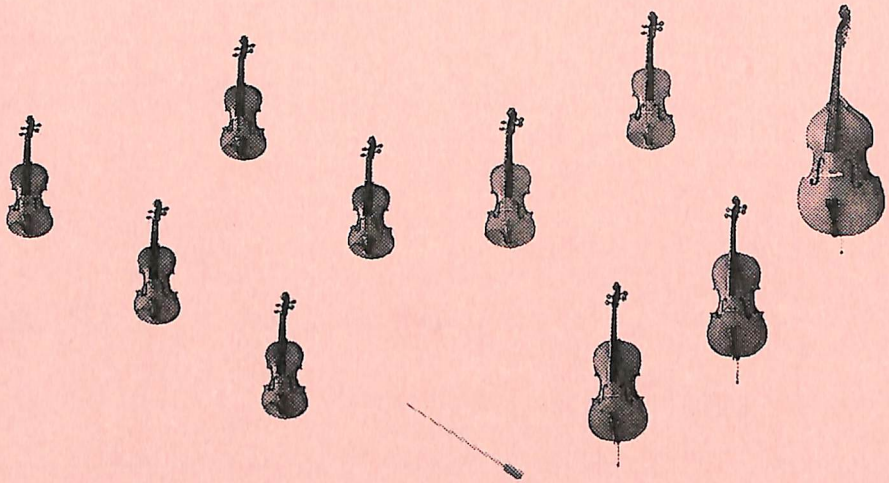
51th Concertino di Kyoto

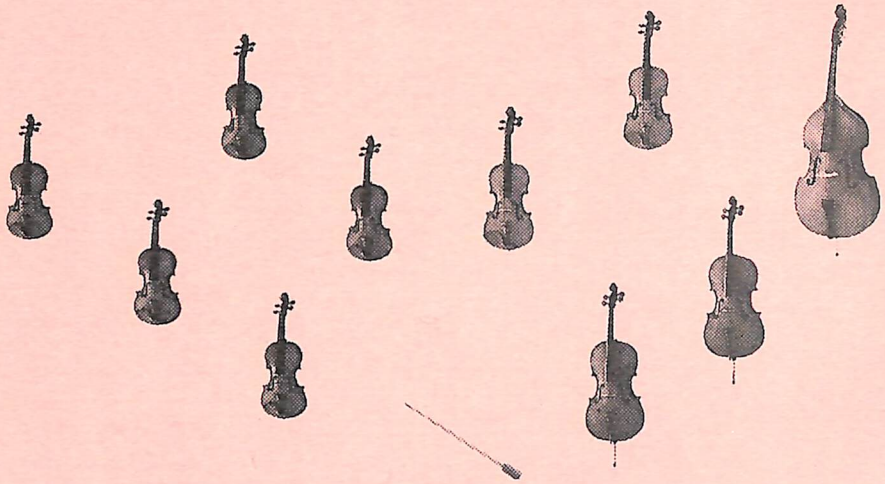
第５１回 コンチェルティーノ ディ キョウト 演奏会



51th Concertino di Kyoto

第５１回 コンチェルティーノ ディ キョウト 演奏会





09. 11. 15（日）　14:00

京都コンサートホール（小）

主催　才能教育研究会京都支部

PROGRAM

バッハ　フーガ　ト短調　BWV.542

ヴィヴァルディ　「調和の幻想」　作品3-1　二長調

Allegro-Largo-Allegro

1stVn 渡辺絵美理　2ndVn 村山直　3rdVn 清水円
4thVn 西田知代　Vc 三輪祐果

ヘンデル　合奏協奏曲 作品6-2　ヘ長調

Andante largetto-Allegro-Largo-Allegro ma non troppo

1stVn 井狩苑子　2ndVn 福永祥子　Vc 中野優香

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

バッハ　オーボエ協奏曲　ヘ長調　BWV.1053

Allegro-Siciliano-Allegro

Oboe　市原　満

モーツアルト　ディベルティメント K.136　二長調

Allegro-Andante-Allegro

指　揮　　江村　孝哉

オーボエ
市原　満

Photo by 谷口崇仁

市原　満　ICHIHARA MAN
トランペットを北村源三、北川晋、故金石幸夫の各氏に師事。80年東京芸術大学音楽学部別科修了。同年オーボエに転向。似鳥健彦氏に師事した後、81年ドイツに留学。
ベルリンでハンスイェルク・シェレンベルガー（ベルリンフィル）、ミュンヘンで故マンフレット・クレメント（バイエルン放送響）の各氏に師事。
86年帰国後、多数のリサイタル、ソロコンサートを開催。
NHK－FMリサイタル出演等ソロの他、木管五重奏団「アマデウス・クインテット」を主宰、活発に演奏活動を行っている。また全国各地で、吹奏楽コンクール、アンサンブル・コンテスト等の審査員や吹奏楽講習会、オーボエクリニックの講師を務める他、「バンドジャーナル（音楽の友社）・ワンポイントレッスン（2002年）、ＭＡＮちゃんの木管アンサンブルの楽しみ（現在連載中）」の連載等執筆活動も行い、多方面で活躍している。
日本オーボエ協会常任理事、玉川大学芸術学部講師、東京ミュージック＆メディアアーツ尚美講師。
（市原満公式HP　http://ichihara-man.com/）

コンチェルティーノ ディ キョウト

才能教育研究会京都支部の最上級生で構成される弦楽合奏団で、昭和34年の結成以来年1回の定期演奏会を開催し、また卒業演奏会において伴奏を担当。過去にモーリス・ジャンドロン(チェロ)ルイ・モイーズ(フルート)フェリックス・アーヨ(ヴァイオリン)といった演奏家と共演してきた。

Violin
井狩 苑子　福永 祥子　渡辺 絵美理　村山 直
西田 知代　清水 円　沼田 大季　高岡 舞

Viola
佐々木めぐみ　江村 美由紀　仲佐 悦子

Violoncello
中野 優香　三輪 祐果　森田 健二

Contrabass
赤松 美幸

Cembalo
永田 悦子

バッハ／フーガ　ト短調　BWV542

フーガト短調 BWV542は、バッハ（1685～1750）が「幻想曲とフーガ」として作曲したオルガン曲を代表する最大傑作のひとつで、1720年にハンブルクで作曲されたと考えられています。フーガのテーマは、オランダ派のオルガンの大家ラインケンに敬意を表して、当時よく知られたオランダの民謡からとられました。バロック時代のドイツはまだ後進国で、その音楽もイタリアとフランスの影響から出発しましたがオルガン音楽だけは例外で、すでにバッハ以前から他国にまさる豊かな伝統を誇っていいました。バッハも、偉大な先人の作品を学ぶことから出発し、やがてイタリア音楽の要素も吸収して独自のスタイルを確立していきました。和声の性格や転調の可能性などに、時代の通念をはるかに超えたバッハの作品中でも特にユニークなものとして注目を集めており、画期的で、斬新なの才能が浮き彫りにされていて、オルガンのみならず、弦楽オーケストラや管弦楽にも編曲されて演奏される機会も多く親しまれています。またオルガン曲「小フーガ ト短調 BWV578」と同じ調性を持つため、両者を区別して「大フーガ」と呼ばれています。

ヴィヴァルディ／協奏曲集「調和の幻想」　作品3の1　二長調

ヴィヴァルディ(1678～1741）が1712年に作曲した12曲の協奏曲集「調和の幻想（レストロ・アルモニコ）」あるいは「調和の霊感」と呼ばれる作品3は、最初に出版した協奏曲集です。何とも魅力的なネーミングは、伝統からの束縛を脱して，自由に想像力を発揮する，といった意図がこめられているようです。12曲それぞれ編成が異なって4つのヴァイオリンの為のもの、2つのヴァイオリンの為のもの、独奏ヴァイオリンの為のものがそれぞれ4曲づつ入っており、今宵の作品3の1はコレルリ以来の合奏協奏曲の形をとって、4人のソリスト群と合奏とが、かけあいながら曲を進行する形をとっています。

ヘンデル／合奏協奏曲　作品６　第２番

合奏協奏曲はバロック時代の協奏曲の最も重要な形式のひとつです。コンチェルティーノと呼ばれる独奏楽器群とリピエーノと呼ばれる合奏からなり、コレルリの作品に典型的な実例を見ることができます。
ヘンデル（1685 ～1756）の作品６として1740年に出版された弦楽のための12曲の合奏協奏曲は、彼がそれまでの病気を克服し新たな創作意欲に燃えている頃の作品で、様式的にはコレルリの流儀にならっていますが、シンフォニックな豊かな響きや強弱の鋭い対比、音楽の劇的な転換、即興的な自由さなどが、ヘンデルならではの斬新さといえるでしょう。合奏協奏曲（コンチェルト・グロッソ）の様式が、ヘンデルによって確立されたと評価されている傑作です。 作品６は、楽章も4～6楽章、楽器の組み合わせも様々ですが、独奏楽器群は二つのヴァイオリンと通奏低音楽器の組み合わせというものが多いようです。「弦楽合奏を志す者にとっては、ヴィヴァルディの作品３、コレルリの作品６などと共に貴重なレパートリー」になっています。

バッハ／オーボエ協奏曲　ホ長調 BWV1053

明るさを基調としながらも、豊かな情感に富んだスケールの大きな世界が繰り広げられるこの協奏曲は、主題の取り扱いの入念さ、トゥッティとソロの絡み合いの見事さ、優美さ、バラエティとニュアンスの豊富さにおいても、一頭地を抜いています。ハーモニーの微妙な移り変わりがもたらす色彩感の変化は正に絶妙と言うほかはないでしょう。第１、３楽章は大規模な三部形式Ａ－Ｂ－Ａ（ダ・カーポ形式）をとっており、何れの部分においてもトゥッティとソロが頻繁に交替する。このような形式は、《ヴァイオリン協奏曲ホ長調》(BWV1042)の第１楽章などで親しいものとなっているが、２つの楽章でこのように規模の大きな形式が用いられた協奏曲は他にあまり例が見られません。
オーボエは、「高い音の出る木」を意味するフランス語の「オーボワ」からきた、2枚のリード（ダブルリード）を使って音を出す楽器です。1670年にはパリで演奏されており、その後またたく間にヨーロッパに広まりました。19世紀に入り、管を細くし、リードもいっそう細く薄く、音孔の位置と大きさを変えることで、洗練された音色を実現させたのです。ちなみに、オーボエの管の一番細い部分の内径はわずか4ミリ、2枚のリード間の開きも0.5ミリ程度しかありません。通常、管楽器では息が足らずに苦しくなるのが普通なのですが、オーボエの場合は逆に管の中にあまり息が入らないため「息が余って」苦しくなる楽器なのです

モーツァルト／ディヴェルティメント　二長調　Ｋ．136

ディベルティメントは、嬉遊曲と日本語訳され、自由な形式による娯楽的なで、18世紀後半に王侯貴族達の食事や祝いの場などで演奏される音楽でした。この曲は二度目のイタリア旅行からザルツブルクに戻り３曲（K. 136～138）一気に書き上げられています。当時のイタリアは音楽の先進国としてほかの国に水をあけており、まだ16歳だったモーツァルト(1756-1791)はこの旅行で多くのものを得て、音楽観や表現力に豊かさを増しています。そうした成果が如実に結実した傑作として、優美で華麗な雰囲気に満たされ、、軽やかな伴奏の上に明澄な旋律が流れる最も親しまれているモーツァルトらしい作品で、また古典派らしい整った美しさを備えた作品になっています。この曲を聴くと、モーツァルトの時代、そしてウィーンのみならずモーツァルトが巡ったヨーロッパ諸国の宮廷の雰囲気を味わうことができる、のではないでしょうか。